鯨研通信

第380号　1990年12月

財団法人 日本鯨類研究所　〒104 東京都中央区豊海町4番18号 東京水産ビル　電話 03 (536) 6521 (代表)

日本の古典文学にみる捕鯨

遠洋水産研究所　奈須敬二

はじめに

筆者が捕鯨の歴史に興味を持ちはじめたのは、今から丁度30年前である。その経緯は、拙書「捕鯨盛衰記」(光琳出版) にしたためであるので、ここでは割愛しておこう。

その捕鯨の歴史を調べる上で、当時の世相を知ることに加えて古典文学書をひもとくことは、極めて有意義であると考え、かねてからそれらを漁っていた。

ところで、日本の捕鯨を描写した古典文学で、筆頭にあげられるのは、井原西鶴の「日本永代蔵」であろう。松尾芭蕉の「奥の細道」をほうふつさせる、その簡にして要を得た筆華は、そもそも彼が俳人であったからに違いない。

筆者はその流暢な名文に魅せられて、何回読み返したことか。これほど、江戸時代の捕鯨黄金時代を如実に表現した文学は、他に類をみない。

鯨という文字が始めて書きしるされた文書は古事記であると、多くの著者は述べている。しかし、筆者はその説を否定したいのである。

また、鯨はいさなと表現されて、万葉集に詠まれていると、書き表わした1文を読んだことがある。たしかにいさなという文字を用いた歌は、12首にみることができる。しかし、鯨を詠んだ歌は1首もない。もとより筆者に万葉集の素養は全くない。強いてあげるならば、中学・高校時代に勉強した程度である。ただ、それら12首の中にある、海・気象をとらえた歌に興味を覚えた。加えて、鯨が万葉集に詠まれていない事実を明らかにするため訳を試みた。文字通り迷訳となり、読者を混乱に陥れるようにでもなれば、恐縮この上ない。その点なにとぞ御容赦願いたい。

その他、文学のジャンルに入れるには、いささか躊躇せざるを得ないけれども、風土記にみることのできる鯨を加えた。

その他、司馬江漢の「江漢西遊日記」にみられる、長崎での詳細な捕鯨見聞記や若干の和歌、俳句そして狂歌を紹介しよう。

古事記

「はじめに」のところで述べたように、くじらと表現されたもっとも古い文書は、古事記であるといわれている。そのくじらが登場する経緯は、つぎのように要約される。

日本神話で天っ神がいたといわれる天上の国、高天原から雲に乗り、日向国 (宮崎県) 高千穂の峯に降り立った一人の神様がいた。その神様、瓊瓊杵尊の子孫に当る鵜葺草葺不合命の子、神倭伊波禮毘古命、つまり後の神武天皇が兄に当る五瀬命と相計らい、東方へ行って天下を支配することを企てた。その企てが実行に移され、神武天皇が日向の益荒男たちを引き連れて、美々津 (今の宮崎県日向市美々津) から大和へ船出した。余談になるが、このため美々津は日本海軍発祥の地とされ、その記念碑が建っている。

途中、豊前国宇佐 (今の大分県宇佐市) へ立ち寄り、瀬戸内海を経て大阪へ上陸の後、東へ向った。ところが、那賀須泥毘古から妨害を受け、再び海へ出て紀伊半島西岸を南下し、潮岬を回って熊野 (一説によれば熊野市二木島とあり、筆者がその地を訪れた時、神武天皇上陸をしるした碑が建立されていた。) から北上して大和へ入っている。

大和では宇陀というところに、兄宇迦斯と弟宇迦斯という2人の兄弟がいた。兄宇迦斯は返逆心を改めて

服従するといつわり、神武天皇への陰謀を企てた。その陰謀を弟宇迦斯の密告で知り、逆に兄宇迦斯は神武天皇から征伐された。その征伐を祝い、弟宇迦斯が宴をはった折、神武天皇が歌った即興の歌に、くじらが出てくるというのである。そこで、くじらと解釈されている部分を、原文のまま引用しておこう。

宇陀野多加紀爾　志藝和那波留
和賀麻都夜　志藝波佐夜良受
伊須久波斯　久治良佐夜流

この原文を、諸々の文献を参考にして抄訳すると、次のようになる。ただし、くじらはここで議論の対象となるために、原文のままにした。

宇陀の高い城蹇に、鴫をとるためにわなを
張ったが、私が待っている鴫はかからないで、
敏捷な久治良がかかった。

宇陀は現在の奈良県宇陀郡に当るらしい。その宇陀郡は、三重県と奈良県の境にあり、熊野から途中まで国道 169 号線に通じている。

そこで、鴫を捕るために張ったわなに鴫はかからないで、久治良がかかったという件に、疑問が浮かんでくる。

ところで、鯨説をとる解釈は、目的とする鴫の代りに大きい動物がかかり、その引合いに鯨が出されたという訳である。さらに、古事記は比諭文なるが故に、鴫をとるわなに鯨がかかるという、ユーモラスを指摘する古事記研究者もいる。

なる程、熊野沖一帯は鯨が多く、とくに当時としては、海岸近くで鯨をみることは、少しも珍らしいことではなかったろう。むしろ、そのような機会は季節によっては、日常茶飯事のことであっても、それ程不思議ではないような気がする。

一方、久治良はくじるという語に由来しており、くじるとは穴を掘ることである。このような山や野で穴を掘る動物は猪であることから、久知良を猪と解釈する説がある。そして、くじらという名前を海に棲む鯨にとらえて、猪自身は別名山くじらとなってしまったというのである。

しかし、久知良をいま少し調べてみると、新村出編「広辞苑」によれば、「くちは倶知と書き鷹の意味」とある。また、金田一京助編「辞海」によれば、「くちは鷙と書き、鷹の古い名称」となっている。

さらに、仁徳記によれば、「百済の俗此の鳥を号けてくちと曰ふ。………是今時の鷹なり」とある。

すなわち、「韓国の人々は、この鳥を名付けてくちという。これは今の鷹である」ということになる。

また、金田一京助と金田一春彦監修「古語辞典」によれば、「くちはタカの意味で上代の百済語」とある。つまり、くちとは昔韓国から日本へ渡来した外来語である。

そして、仲哀天皇時代（紀元前131－200年）に、神功皇后が新羅（古代韓国の国名）を征服し、さらに応神天皇時代に、百済から「論語」や「千字文」が献上されている。これらのことなどから、「古事記」が執筆された時点で、すでに韓国文化が日本へ渡来していたことは、明らかである。

これら諸々の記述から検討を加えると、「古事記」の久治良は、久知を鷹と解釈し、良は神田秀夫・大田善麿校注「古事記」（日本古典全書、朝日新聞社）によれば、接尾語のらとして扱われている。つまり、そのらは複数の意をあらわす。

したがって、筆者は久知良は鷹らとした方が、無理のない解釈と考えるのである。

そこで、前に抄訳した古事記の一部は、「……私が待っていた鴫はかからなくて、鷹らがかかった。……」と訳したほうが、自然のようである。

よって、日本において鯨という文字がはじめて見られる文書は、古事記であるという説を筆者は否定せざるを得ない。もっとも、ここでいう鯨とは、イルカに対してという意味である。何となれば、古事記にイルカという文字がでてくるのである。

そこで、まず古事記にみられるイルカの部分を原文のまま紹介しておこう。

すなわち、仲哀天皇の条に、

鼻 毀 入 鹿 魚 既 一 浦 依
……………………………………
……………………………………
亦 其 入 鹿 魚 之 鼻 血 臭
故 其 浦 號 血 浦 謂
今 都 奴 賀 謂 也

とある。

この原文を諸々の文献を参考にして解釈すると、つぎのようになる。

海岸へ乗りあげて、鼻に傷を受けたイル
カ（いわゆるストランディングしたイル
カ）が、浜一杯にいた。

……………………………………………

……………………………………………

そのイルカの鼻から出た血がくさかった。

という訳で、その浦を名付けて血の浦と

呼ぶ。

その地を今ではつぬがといっている。

つぬがとは、神田秀夫・大田善磨校注「古事記」によれば、現在の福井県敦賀市の付近である。

このように入鹿魚という文字に魚がみられる以上、これはまぎれもない海豚のことである。そして、日本ではもっとも古い鯨の仲間を表現した文字であり日本人と鯨の接触は、イルカが最初であったに違いないと、筆者は信じて疑わないのである。なお、元東京大学医学部教授でイルカ分類の大家であった故小川鼎三博士は、この古事記にでてくるイルカを、*Lagenorhyncus*（カマイルカ属）または *Phocoenoides*（リクゼンイルカ属）ではないかと考えていた。

イルカと人間との接触は、ギリシャ神話にもみることができる。

ところは地中海、イルカに救われたアライオンの話は、シェクスピアの「夏の夜の夢」注）にもでてくる。

アライオンは神ではなく実在した人物と伝えられ、紀元前7世紀後半の抒情詩人で、ギリシャ東部のエーゲ海に浮かぶ島レスボスに生まれた。彼は、ギリシャ本土とペロポネソス半島を結ぶ地峡の西端にある、コリントへ永く滞在した。彼はまた、音楽家特にハープの名演奏家でもあった。

そして、彼は当時ギリシャが行っていた、シシリー島のギリシャ植民地での音楽コンテストに参加した。そこで優勝したアライオンは、多くの富と賞品を手にしてコリントへ帰るため、コリント人の船を選んだ。それは、地中海に海賊が横行していたため、同じ所に住むコリント人を信頼したからである。

ところが、コリント人達は、彼の信頼に反して海賊であった。その海賊達がアライオンを海へ投げ込み、富や賞品を奪う企（くわだて）を知ったアライオンは、命だけは助けるよう懇願した。しかし、その願いは海賊達に受け入れられなかったが、かろうじて最後に歌を唄うことは許された。アライオンがハープを手にして船尾に立ち、唄いはじめると、どこからともなくイルカの群がやってきた。そして、唄い終ると海へ投げ込まれたアライオンのところへ、1頭のイルカが近寄ってきた。そこで、アライオンを背中に乗せたイルカは、無事陸岸まで送りとどけたという話である。

このような話に類似する、例えば人間の子供がイルカに乗せられた話など、ギリシャ・ローマ時代には枚挙にいとまがない。

したがって、洋の東西を問うことなく、人間と鯨のかかわり合いは、イルカに始まったと考えるのである。そのような事柄からも、筆者は古事記の鯨説を否定したいのである。もっとも広義にはイルカも鯨である。その意味では、鯨が描写された最古の文書が古事記であることは正しい。しかし、古事記の鯨説はイルカではなく、いわゆる鯨を指していることは、既述したように明らかである。

万葉集

はじめにのところでしるしたように、鯨は万葉集にも詠まれていると、書き表わした冊子を目にすることがある。しかし、万葉集に鯨そのものも詠んだ歌は、4516首のうち1首もない。

また、万葉集には海の枕詞として、いさなが用いられていると表現した文も少なくない。しかし、この表現は適切ではない。何となれば、修飾または句調を整えるために用いられる枕詞は、5音で1句（4音または6音のこともある）をなしている。したがって、枕詞として述べる場合には、いさなとりまで表現しなければならない。

では12首を紹介しよう。

巻第2の歌131

柿本朝臣人麻呂、石見の国より妻に別れて上り来る時の歌2首。

石見の海　角（つの）の浦廻（み）く　浦なしと　人こそ見らめ潟（かた）なしと　人こそ見らめよしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟はなくとも鯨（いさ）魚（な）取り　海辺を指して和田津（にきたつ）の　荒礒（ありそ）の上にか青く生（お）ふる　玉藻つ藻　朝羽（あさは）振る　風こそ寄らめ　夕羽振る　波こそ来寄れ波の共（むた）　か寄りかく寄る　か寄りかく寄る　玉藻なす　寄り寝し妹を露霜（つゆしも）の　置きてし来（く）れば　この道の　八十隈（やそくま）ごとに　万（よろづ）たび　かへり見すれど　いや遠（とほ）に　里は離（さか）りぬ

いや高（たか）に　山も越え来ぬ　夏草（なつくさ）の思い萎（しな）えて　偲（しの）ふらむ　妹（いも）が門（かど）見む　靡（なび）けこの山

潟は礒という説、また和多豆は熟田津（にぎたず）（愛媛県松山近くの船着場）という説あり。石見は島根県西部を指す。角とは島根県江津市都野津町付近を指すらしい。鯨取りは「海」の枕詞。荒礒は潮汐によって岩礁が海

面上に出たり、沈んだりする海辺を指す。朝羽振るは、夕羽振るとともに、朝および夕方に、海と陸との温度差に起因した、海陸風のことを指しているのであろう。

すなわち、朝は陸が海より早く気温が高くなるため、陸から海へ向かって風が吹く。これが朝羽振ると解釈される。一方、夕方は陸が海より早く気温が低くなるため、海から陸へ向かって風が吹く。これが夕羽振ると解釈される。その海陸風によって起こる波のことが、波こそ来寄れと表現されているのであろう。この歌を解釈すると、つぎのようになる。

石見の海の角の入江を回ってみて、舟が泊るようなよい入江がないと人はみるだろうし、より遠浅（よい磯）がないと人はみるだろう。しかし、たとえようのない遠浅（磯）はないにしても、海辺をめざして和多豆の荒い磯の付近に、青々と生い茂る美しい海草が、朝方陸から吹く風、そして、夕方海から陸へ向って吹く風によって起きる波が揺れている。その風波に寄りかかるようにする美しい海草のように、寄り添寝た妻を残してきたので、この道の多くの曲り角ごとに、何回となく振り返ってみたが、ますます遠く妻の里は離れてしまった。ますます高くなった山を越えてきた。夏草のようにしおれて、私を偲んでいるのであろう。門に立つ妻を見よう。なびけこの山。

巻第2の歌138

或る本の歌1首　あわせて短歌

石見の海　津の浦をなみ　浦なしと　人こそ見らめ潟なしと人こそ見らめ　よしゑやし浦はなくとも　よしゑやし潟はなくとも　鯨魚取り海辺を指して　和田津の　荒磯の上にか青く生ふる　玉藻沖つ藻　明け来れば　波こと来寄れ　夕されば　風こと来寄れ波の共く　か寄りかく寄る玉藻なす　靡き我が寝し敷栲の　妹が手本を露霜の　置きてし来ればこの道の　八十隈ごとに　万たび　かへり見すれど　いや遠に　里離り来ぬ　いや高に山も越え来ぬ　はしきやし　我が妻の子が夏草の　思い萎えて　嘆くらむ　角の里見む靡けこの山

この歌は131番に手を加えてつくられたものとされている。したがって意味は131番と同じである。

巻第2の歌153

大后の御歌1首

鯨魚取り　近江の海を　沖放けて　漕ぎ来る船　辺付きて　漕ぎ来る船　辺っ櫂　いたなく撥ねそ　若草の夫の　思ふ鳥立つ

鯨魚取りは「近江の海」の枕詞。この訳はつぎのようになる。

近江の海を沖合はるかに漕ぎくる船よ、岸近く沿いに漕ぎくる船よ　いずれの船も櫂をやたらに勢よくあげるな。

巻第2の歌220

讃岐の狭岑の島にして、石中の死人を見て、柿本人麻呂が作る歌1首

玉藻よし　讃岐の国は　国からか見れども飽かぬ　神からか　ここだ貴き　天地　日月とともに　足り行かむ　神の御面と　継ぎ来たる　那珂の港ゆ　船浮けて　我が漕ぎ来れば　時つ風　雲居に吹くに　沖見れば　とゐ波立ち　辺見れば　白波騒く　鯨魚取り　海を畏み　行く船の　梶引き折りて　をちこちの　島は多けど　名ぐはし　狭岑の島の　荒磯面に　いほりてみれば　波の音の　繁き浜辺を　敷栲の　枕になして　荒床に　ころ臥す君が　家知らば　行きても告げむ　妻知らば　来も問はましを　玉桙の　道だに知らずおほほしく　待ちか恋ふらむ　むしき妻らは

玉藻よしは枕詞で「讃岐」にかかる。那珂の港は、現在の丸亀市金倉川付近といわれている。王桙は道の意。時つ風は、新村出編「広辞苑」によれば、「潮が満てる時に吹く風」と説明されている。また、「萬葉集（日本古典集成、新潮社）」によれば、「引き潮の前後、時を定めて一定的に吹く強風」と説いている。しかし、これら二つの説明にみられる、満ち潮と引き潮は全く逆の現象である。いずれにしても、潮汐は天体の引力に起因する現象で、風との因果関係は、筆者の知る範囲では考えられない。

ただし、風が沖合いから岸へ向って吹きつづけると、海岸の水位が高くなる。すると当然のことであるが水は高いところから低いところへ流れるために、引き潮が起こる。逆に、風が岸から沖合へ向って吹きつづけると、海岸の水位が低くなって、沖合から海水が

流入してくるために満ち潮が起こる。このような、一連の引潮や満潮は、風の吹き具合による気象条件で起きるため、気象潮と呼ばれている。したがって、ここで表現されている時つ風は、気象潮のことを指しているものと思われる。鯨魚取りは「海」の枕詞。なお、この歌の訳をつぎに述べておこう。

美しい海藻が揺れ動く讃岐の国は国柄のためか、いくらみても飽がこない。神のためか大へん貴い。天地日月ともに充ち足りて行くであろう。神の御顔であるとして受けついできた。那珂の港を船で我らが漕ぎ渡ってくると、風が吹きはじめたので、沖を見るとうねりがあり、岸を見ると白波がざわざわと立っている。この海の恐ろしさに、船の梶が折れるばかりに漕いで、あちこちに島は多いけれども、名の尊く不思議な狭岑の島に荒波の寄せる磯に、粗末な小屋をつくってみると、波の音が騒がしい浜辺を寝床と枕にして、おのづから寝ている人がいる。この人の家がわかれば、行って知らせもしょう。妻が知ったならば、来て尋ねるだろう。道さえ知らなく心配しながら、待ちこがれることだろう。いとしい妻は。

巻第3の歌366

角鹿の津にして船に乗るときに、笠朝臣金村が作る歌1首あわせと短歌

越の海の　角鹿の浜ゆ　大船に　真楫貫き
下ろし　鯨魚取り　海道に出でて　喘きつつ
我が漕ぎ行けば
ますらをの　手結が浦に　海人娘子　塩焼
く煙　草枕　旅にしあれば　ひとりして　見
る験なみ　海神の　手に巻かしたる　玉たす
き　懸て偲ひつ　大和島根を

角鹿の津とは敦賀の港を指し、越の海は北陸の海、つまり越前・越中・越後の海の総称である。真楫は左右一対の櫓の意味。鯨魚取りは「海道」の枕詞。手結が浦は敦賀の東岸の田結の付近らしい。この366の歌の訳は、つぎのようになる。

北陸の海の敦賀の浜から大船に櫓を備えて海路に出て、あえぎつつ櫓を漕いで行くと、逞しい男が手結が浦で、漁師の娘達が塩をつくるため、海藻を簀の上に積み、海水をかけてこれを焼く煙は、旅の身であるため、ひとりでは見がいがないので、海の神が手に巻いている、尊いたすきをかけて偲んだ大和の国を。

巻の6歌931

車持朝臣千年が作る歌1首あわせて短歌

鯨魚取り　浜辺を清み　うち靡き　生ふる
玉藻に　朝なぎに　千重波寄せ　夕なぎに
五百重波寄す　辺つ波の　いやしくしくに
月に異に　日に日に見とも　今のみに　飽き
足らめやも　白波の　いさき廻れる　住吉の
浜

鯨魚取りは「海辺」の枕詞。住吉は「すみよし」の古称で、その浜は、大阪市住吉区付近の海岸を指し、現在の海岸よりは、さらに陸地内にあった。その歌の訳はつぎの通り。

浜辺が清らかなため、海の中で揺れている美しい海藻に、朝凪ぎとなって朝方風が止んでも、つぎつぎに寄せる波は、夕凪となって風が止み、幾重にも波が寄せる。この波がしきりに寄せ、月が進むにつれ日を追って見ても、さらに今だけでも見飽きることはない。白波の花が咲きめぐる住吉の浜は。

巻第6の歌1062

難波の宮にして作る歌1首あわせて短歌

やすみしし　我が大君の　あり通ふ　難波
の宮は　鯨魚取り　海片付きて　玉拾ふ　浜
辺を近み　朝羽振る　波の音騒ぎ　夕なぎに
楫の音聞こゆ　暁の　寝覚に聞けば　海石の
潮干の共　浦洲には　千鳥妻呼び　葦辺には
鶴が音響む　見る人の　語りにすれば　聞く
人の　見まく欲りする　御食向ふ　味経の宮
は　見れど飽かぬかも

鯨魚取りは「海」の枕詞。この歌の訳は、

安らかに天下をお治めになるわが天皇が、いつも通う難波の宮は、海に面していて、石や貝を拾う浜辺が近いので、朝風が吹いて波が揺れ、波の音がざわめき、夕凪ぎに櫓の音が聞こえる。夜が明けて寝覚めに聞けば、岩礁が潮が引くとともに現われ、浜の波打ち際には千鳥が妻を呼び求め、葦辺には鶴の声がひびきわたる。見た人の語りぐさにすると、これを聞いた人も見たいとするこの難波の宮は、いくら見ても見飽きない。

となる。

巻第13の歌3335

玉桙の　道行く人は　あしひきの　山行き
野行き　にはだづみ　川行き渡り　鯨魚取り
海道に出でて　畏きや　神の渡りは　吹く風
も　のどには吹かず　立つ波も　おほには立
たず　とゐ波の　立ち塞ふる道を　誰が心
いたはしとかも　直渡りけむ　直渡りけむ

鯨魚取りは「海道」の枕詞。神の渡りは、海難の多い海峡を海神が支配する所で、ここでは現在の福山市西部の海と考えられている。この歌の訳は、

旅路を行く人は、山を越え野を越え、雨で地上にまで溢れ出た水嵩の増した川を渡り、海に出て恐ろしい神のいる海の難所、吹く風ものどかには吹かなくて、立つ波も並ではなくて、大きいうねりのある海路を、誰の心をいとおしんで、直ぐに渡ってきたのか、直ぐに渡ってきたのか。

となる。

巻第13の歌3336

鳥が音の　神島の海に　高山を　隔てにな
くて　沖つ藻を　枕になし　蛾羽の　衣だに
着ずに　鯨魚取り　海の浜辺に　うらもなく
臥したる人は　母父に　愛子にかあらむ　若
草の　妻かありけむ　思ほしき　言伝てむや
と　家問へば　家をも告らず　名を問へど
名だにも告らず　泣く子なす　言だにとはず
思へども　悲しきものは　世間にぞある　世
間にぞある。

鯨魚取りは、「海の浜辺に」の枕詞で、この歌の訳はつぎの通り。

神島の海に高い山を境にして、沖の海藻を枕にし、うすい着物を着なくて、浜辺に何事もなく臥しているこの人は、父や母にとっても、いとし子なのであろう。妻もいたであろう。ねがいことがあれば伝えてあげようかと、家を尋ねても家を答えず、名を尋ねても名も答えなくて、泣いてばかりいる子供のように、何も答えない。思えば思う程、悲しいものは人の世である。

巻第13の歌3339

備後の国の神島の浜にして、調使首、屍を見て作る歌１首　あわせて短歌

玉桙の　道に出で立ち　あしひきの野行き
山行き　にはたづみ　川行き渡り　鯨魚取り
海道に出でて　吹く風も　おほには吹かず
立つ波も　のどには立たぬ　畏きや　神の波
りの　しき波の　寄する浜辺に……以下略

備後の国は、吉備の中でも都にもっとも遠い国の称で、広島県の東部に当る。神島は福山市の西部、芦田川西岸の小山を指し、奈良時代福山市は海で、神島の浜辺は舟の避難所であったと想像されている。鯨魚取りは「海道」の枕詞。この歌の訳は、

旅に出て野山を越え、雨で水の溢れた川を渡り、海へ出て吹く風ものどかに吹かなくて、立つ波も静かではない。恐ろしい神のいる難所の、次々に波が打ち寄せる浜辺に……。

となる。

巻第16の歌3852

鯨魚取り　海や死にする　山や死にする
死ぬれこそ　海は潮干て　山は枯れすれ

鯨魚取りは「海」の枕詞。この歌の訳は、

海でも死ぬことがあるのか、山でも死ぬことがあるのか。死ぬからこそ、海は潮が引き、山は枯れるのだ。

となる。

第17の歌3893

昨日こそ　船出はせしか　鯨魚取り　比治
奇の灘を　今日見つるかも

鯨魚取りは「比治奇の灘」の枕詞。比治奇は不明であるが、山口県の響灘ともいわれている。この歌の訳は、

ほんとに昨日船出したばかりなのに、比治奇の灘を

今日はしかと見た。

となる。

はじめにのところで述べたように、以上は、万葉集に鯨そのものを詠んだ歌のないことを理解するため、解釈を試みたものである。そして、万葉集では鯨魚をイサナと読み、鯨魚取りを海にかかる枕詞として用いられていたことがよくわかる。

その鯨魚取りが海の枕詞となった経緯については、筆者が浅学のため究明することを断念した。

ところで、12首のうちイサナと書き表わした漢字は、東光治著「続萬葉集動物考」によれば、鯨魚5、鯨名1、伊佐名1、不知魚3、勇魚2となっている。

なお、イサナは磯魚（イソナ）が転じたもので、磯に棲む魚を指す場合もある。しかし、万葉集に用いられているイサナについて磯魚説は否定されている。

風 土 記

本書を文学のジャンルに入れるには、いささか問題がある。しかし、日本古典文学全集にも集録されているので、紹介しておきたい。

その風土記とは、和銅6（713）年に出され、郡郷など地方名の由来，地形，産物および伝説などをしるした地誌である。そして、常陸国（現在の茨城県）に行方と久慈の郡さらに壹岐の鯨伏の郷の3ケ所に、鯨をみることができる。

行方の郡

茨城県の海岸に行方という郡があり、その郡役所の西に渡船場があった。いわゆる行方の海である。そこでは塩をつくるために海藻を焼き、魚も非常に多いが、鯨鯢などは今だかって見たことがないという。一方、郡役所の南七里のところに、男高という里があり、常陸の国司（朝廷から諸国に赴任せしめた地方官）となった大夫が池をつくった。その池から南へ行ったところに鯨岡があり、その岡に昔海鯨が腹這ってきて、寝てしまったという伝説がある。

久慈の郡

茨城県の北部にあり、その昔郡役所から南の、近いところにあった小さな丘が鯨鯢に似ているところから、倭武天皇が久慈と命名したといわれている。

このような記述から、茨城県の海岸には鯨が漂着していたのであろう。岡という表現から、これらの鯨は大型の類と想像されるが、近年茨城県沿岸に大量のゴンドウクジラが打ち揚がったという報告がある。しかし、ゴンドウクジラは小型の鯨である。

また、常陸の国に久慈理の岳という岡のあることもしるされている。その岡の形状が鯨に似ているために、そのような名称が生まれたとある。そして、土地の人々の間に、鯨のことを久慈理という言葉が生まれたとある。

また風土記の逸文（散逸して伝わらぬ、また一部分のみ残存する文書――新村出編「広辞苑」より）に、壹岐の国の鯨郷について、つぎのような一文をみることができる。

鯨伏郷は、昔鮐鰐が鯨を追いかけてきたので、鯨は走ってきて隠れて伏した。それ故に鯨伏といい、俗に鯨のことを伊佐とす。

この鮐鰐は、鯨を追いかけてきたことから、恐らくシャチであろう。

日本永代蔵

時代は降って江戸時代の文学に、鯨を見受けることができる。それは井原西鶴著「日本永代蔵」であるが、その書には作者の署名がないといわれている。したがって、井原西鶴の著作という直接の證拠はないことになる。しかし、文体から西鶴であることは、明らかにされている。

井原西鶴とは、江戸時代の浮世草紙、つまり一種の小説作家であり、さらに俳人で、寛永19（1642）年大阪に生まれ、元禄6（1693）年に没している。

その西鶴が元禄元（1688）年世に表わした「日本永代蔵」に、「天狗は家なき風車」がある。これは西鶴が紀州太地を訪れた時の印象記で、当時の社会世相や町民の経済生活を通して、彼一流の筆法で描写した捕鯨の様子は極めて興味深い。

先づ、西鶴が太地で受けた印象を、実感としてとらえるために、原文を紹介しておこう。

> 智恵の海広く日本の人の祖を見過にうとき唐楽天が迯て帰りことのおかし。詩をうたふは耳遠く横手ぶしといへる小哥の出所を尋ねけるに紀路大湊泰地といふ里の妻子のうたへり、此所は繁昌にして若松村立ける中に鯨恵比須の宮をいはひ、鳥井に其魚を胴骨立しに高さ三丈ばかりも有りぬべし。

目なれずして是にけう覺て浦人に尋ねければ、此濱に鯨突の羽指の上手に天狗源内といへる人。毎年仕合男としておかし此人をやとひて舟を仕立けるに、有時沖に一むら夕立雲のごとく塩吹けるを目がけ一の鐡を突て風車の験をあげしに。天狗とはしりぬ。諸人浪の聲をそろへ笛太皷鉦の拍子をとって大綱つけて轆轤にまきて磯に引きあげるに其たけ三十三尋貳尺六寸千味といへる大鯨前代の見はじめ七郷の賑い竈の煙立つづき。油をしぼりて千樽のかぎりもなく。其身皮ひれまで捨る所なく長者に成は是なり。切かさねし有様は山なき浦に珍しく雪の富士紅葉の高雄爰にうつしぬ。

いつとても捨置骨を源内もらひ置て是をはたかせ。油をとりけるに思い外成徳より分限に成。すゑすゑの人のため大分の事なるを今まで氣のつかぬこそおろかなれ、近年工夫をして鯨網を 拵 見付次第に取損ずる事なく今浦々に是を仕出しぬ。昔日は濱はさしの住せしが。檜木造りの長屋貳百余人の猟師をかかへ舟ばかりも八十艘何事しても頭に乘って今は金銀うめきて、遣へども跡はへらず根へ入ての内 證 吉是を楠木分限といへり。

「泰地」は現在の和歌山県東牟婁郡太地町。「楽天」は唐時代の大詩人。「横手ぶし」は紀州の漁村で唄われた歌とされているが、横手という地名は紀州には見当らないといわれている。「魚の胴骨」は鯨の肋骨でこれは左右内側に湾曲した細長い一対となっており、その骨を立てると丸味を帯びた逆V字状となり、恰好の門柱になる。しかし、「高さ三丈（約9メートル）ばかり」とは誇張であるが、鯨の偉大さを認識させるためであろう、その豊かな描写がおもしろい。「鯨突」とは、銛で鯨を突くこと。「羽指」とは、勢子舟（江戸時代から明治中期まで行われた、日本独特の網で鯨を捕獲する際に用いた舟の一種。鯨の泳ぐ方向に先回りして張った網に鯨を追い込み、銛を打つ役を受持つ舟。）の舳先に立って、鯨へ銛を打ち込む人。「天狗源内」の天狗は源内という羽指の名人の屋号。「一の鐡」は、羽指が鯨へ向かって、一番目に投げる銛。「風車の験」とは、銛が鯨に命中した印に、風車の紋所のついた旗を高く揚げたこと。「轆轤」とは、重い物を綱で引き寄せる時に用いる、柄のついた滑車で先づ鯨を引き揚げる時に用いる。その他に鯨の脂肪層を剝ぐ場合、また肉塊を引き寄せる場合に用いる。地方によっては、「がくらさん」または「かくらさん」と呼ばれていた、今でいうキャンプスタンのことである。「其たけ三十三尋貳尺六寸（小さく見積っても約五十メートル）」と描写されている体長は、その数字の桁から非常に正確な測定値と考えられる。なお、当時は現在における鯨の体長測定法（上顎の先端から尾羽までの水平距離）と異なり、体に沿って測定していた。したがって、体長は現在より大きい値となっていた。しかし、如何に「大鯨前代の見はじめ」とはいえ、余りにも大きく、このような体長の鯨はいない。恐らく、大きいという意味で三十三尋という数字を用いたのであろう。先述した、胴骨の三丈という描写と共通している。「千味」とは、セミクジラの意味。

「雪の富士」は、鯨の脂肪層が白いため、その脂肪層が山のように積みあげられた様子を、雪の積った富士山に例えた形容であろう。筆者も、かって日本沿岸に設けられた捕鯨事業所で、同じような情景をよく見たものであるけれども、まことに実感がこもっていて、巧な描写に感心するばかりである。

「紅葉の高尾」は、紅葉で有名な京都の高尾山を指しているものと考えられるから、山と積まれた赤い鯨の肉を、紅葉に例えた描写であろう。

「鯨網」とは、延宝3（1673）年紀州の太地で考案された網取式捕鯨で、従来用いられていた銛を併用して、鯨を網にからませる捕鯨の方法である。この鯨網の開発で、捕鯨の効率が倍増し、日本に第一期の捕鯨黄金時代を迎えた。「楠木分限」とは、楠は土中深く根を張ることから、堅実な富豪を指している。

ここで原文を解釈しておこう。

広い海にも似た智恵の豊かな日本人の働きをみて、世渡りにうといとゆう中国の楽天が逃げかえったことのおかしさ、詩を歌ふのは聞いてもよくわからないもので、横手節という小唄の出所を尋ねてみると、紀州の泰地という村の妻子が歌っているという。その泰地は賑い栄えていて、若い松の林の中に鯨恵比須の宮を祀り、鳥居に鯨の肋骨が立てられているが、その高さは約三丈はあろう。

見なれないので驚いて浜辺の人に尋ねたところ、この浜に鯨突きの上手な羽指に、天狗源内という人がいた。この人は毎年運の良い男なので雇い、鯨舟を仕立てた。ある時、沖に夕立のように大きい潮を吹いた鯨を目がけて投げた、一番最初の銛が命中した。そこで、風車の旗印をあげたところが、その羽指が天狗とわかった。

陸上の鯨解体場で待機していた人々は、浪の音に掛

け声を合わせて、笛大鼓や鉦で柏手をとりながら、鯨に結びつけた太い綱を轆轤に巻きつけて、海岸へ引き揚げた。その体長は33尋2尺5寸もあるセミクジラで、大きさは前代未聞である。

その鯨のお蔭で七浦が賑い、各家々からは暮しの豊さを象徴するかのように、食事の支度をする竈の煙が立ちのぼっている。

鯨の油を搾ったところ、その量は千樽以上もあった。その肉や皮そして鰭まで捨てる所がなく、富豪になるのはこの鯨のためである。裁割されて積み重ねられた皮や肉は、山のない浜に、白い皮は雪が積った富士山を、また赤い肉は紅葉の名所高雄山を、ここへ移したようであった。

鯨が捕れた時は、何時も捨てていた骨を、源内はもらって粉砕し、油を採ったところ、予想外に利益があがり、そのために金持となった。普通の人々が、今までそのことに気がつかなかったことは、愚かであった。

近年工夫をして鯨網を考案し、鯨を発見次第、捕りそこなうことがなくなり、今では浦々で鯨網を使用しはじめた。

以前、源内は浜辺の小さい家に住んでいたが、檜造りの長屋を建て、200人余りの鯨捕り達を雇い、鯨舟だけでも80艘を数えた。何をしても順調で、今は金銀が有り余る程たまり、その金銀をいくら使っても、使い切ることがない、押しも押されぬ大金持となっている。これを楠木分限という。

この西鶴の「日本永代蔵」は、いささか誇張されているところもあるが、当時における捕鯨業の繁栄振りが、手にとるように描写されていて大へん興味深い。「鯨一頭捕れば七浦賑う」という昔からのいい伝えは、まさにこの西鶴が表現した、「七郷の賑い」に由来しているのである。

江漢西遊日記

江戸時代の捕鯨にまつわる文学として、「江漢西遊日記」があげられる。

司馬江漢は延享4（1747）年江戸に生まれたが、祖先は紀州の人である。彼は江戸町人出の知識人で、狩野派の水墨画を学び、洋風の銅版画を創製し、油絵を描いたことで有名となっている。また、西洋地理学、天文学にも興味をもち、地動説の啓蒙家としても知られている。そして、貝原益軒、新井白石、杉田玄白、本居宣長さらに与謝蕪村らと並んで江戸時代が輩出した、世界に誇り得る日本の文人の一人である。

その司馬江漢は、画の修行に江戸から長崎へ旅立った。天明8（1788）年4月23日のことである。彼は道中に毎日克明な日記をつけた。それが安政6（1795）年世に出た「江漢西遊日記」である。

日記には、長崎での捕鯨紀行をみることができる。その動機は、親交のあった蘭方医（オランダから伝わった医術を修得した医者）、大槻玄沢の勧めといわれている。そして、当時現在の長崎県五島の生月で行われていた、鯨捕りの様子が絵入りで、実にリアルに描写されている。そこで、江戸文人の目に映った、捕鯨の印象記を部分的に紹介しておこう。なお、文体は筆者が若干意訳さらに加筆して現代文に直し、カッコ内に注釈を加えたことを断っておく。

天明8年10月10日長崎着。

12月4日生月嶋（五島列島の一つ）に渡り、益富又佐衛門（江戸時代肥前の国で繁栄を極めた網取式捕鯨の組主）とその息子亦之助に会う。捕鯨を見聞するため、この島に30日間滞在する。

鯨漁は冬の寒さの厳しい時から、正月松飾りのある間が最盛期という。6日、天気。亦之助に鯨漁の時期を聞いたところ、「冬小寒の10日前頃から鯨が来遊しはじめる時である。これを小寒カグメといって、いただくという意味である」と答えた。その頃から鯨を捕る準備をする。また春の土用（立夏の前18日）に終漁となる。

11日、時雨、風強く霰、きわめて寒く、手足が冷たい。亦之助の言によれば、このような天気には、必ず鯨が岸に近づくという。

12日、風雨、寒い。このような嵐のあとには、必ず鯨がくるといい、また鰤漁も大漁が期待できる。

13日、天気回復。鯨を発見したという知らせに、鯨舟にのる。漁夫が6人で艪を漕ぐ、舟は矢のように走る。風はおだやかで、波もないけれども、ウネリが大きい。タカマツ（シャチ）が潮を吹いている。タカマツがくると、鯨はいなくなるという。鯨舟は舟べり（舟の側面）をトントンと頻繁に打ったが、それは舟べりをたたく音が海底に達し、鯨をおどかすためである。

16日、天気。朝起きると鯨がくるという知らせがあったが、鯨舟には乗れないだろうと思っていた。ところが、「さあ、さあ」と鯨舟へ乗ることを促されたので、飯に水をかけて椀1杯食べて、そのまま舟に乗った。

乗るが早いか、艪を押す音が早いか、まことに矢のような速さであった（この鯨舟は、恐らく鯨に銛を打

ち込む勢子舟と考えられる。当時勢子舟の舟底には、海水との摩擦を小さくするために、蝋を塗ったといわれている）。鯨舟は、あちらこちらと漕ぎ回ったが、鯨を発見することはできなかった。

そこで、鯨を捕ることを止めて、生月へ帰ろうとした時、沖へいた鯨舟が、しきりに合図の旗を振って呼んでいるのがみえた。丁度午後の4時頃である。朝から椀1杯しか食べていないのに加へて、舟で揺られたので、舟酔いして気分が悪い。しかし、鯨舟は大嶋の方へ向って、8丁艪のため、飛ぶように「アリャ、アリャ、アリャ」という掛け声とともに走る。舟酔いで気分が悪いために、銛につながれた綱の中にうつむく。

約4里（約15キロメートル）ばかり走った時、頭をあげてみると、鯨が潮を吹いて再び海中へ潜った。その周辺に鯨舟が7、8艘いた。亦之助の「鯨が捕れた、鯨が捕れた」という声で気分がよくなった。そこで、その様子を見物すると、銛に柄がついていて、それに綱が連結されており、鯨の背中に乗るようにして鯨舟を近づけると、鯨との距離は僅かに2～3間(3.5～5.5m）になった。その時、銛を17本打ち込んだため、17艘の鯨舟が鯨に曳かれはじめた。

次第に鯨が衰弱し、鯨は普通鼻の付近の海水とともに息を吹きあげるが、海水は吹きあげなくて、息のみを吹いている。ここで鯨へ向かって剣を数本投げた。そして、鯨が非常に弱った時、1人の若者が鯨の頭の上にある、潮を吹く鼻へ登り、刃物で穴をあけて、そこへ綱を通す。

また、若者が1人海へ飛び込んで、綱を鯨の腹側に回し、鯨を釣るようにして、その綱を2艘の引舟に渡す。この2艘の引舟を持双舟と呼び、その両方の舟に挟まれた鯨は、まだ完全に死んでいなくて鰭を動かしており、そのまま海岸まで鯨を曳いて行くのである。（原文を忠実に訳すると、このように生きたまま海岸にまで曳くことになっている。しかしそのようなことはあり得ないであろう。）

なお、捕った鯨が沖で完全に死んだ場合、鯨は浮かなくて沈む（ただし、セミクジラおよびマッコウクジラを除く）。これを死銛と呼んでいる。したがって、死銛となる前の、まだ鯨が浮いている状態で、持双舟に鯨を渡さなければならないため、その頃合いをみることが難しい。

鯨が海岸へ着いたのは、夜の10時であった。種類はセミクジラで1番高価である。体長は15間（約27m。ただし、当時の体長は日本永代蔵で述べたように現在の上顎先端から尾羽までの水平距離ではなく、体に沿って測定していた。したがって、当時の体長は現在の表示に比較して、過大になっていた。特に、セミクジラは他の鯨種より肥満なため、体にそった場合の体長は過大になる。という訳で、セミクジラの体長は現在の表示と比較すると、さらに大きくなっていた）。

翌朝4時に人足（力仕事をする労働者）数10人が、松明を照らして鯨の解体をはじめた。長刀に似た包丁を持って、鯨の背中に登る。まづ、左右の下顎を切り落してから頭の上を切り、つづいて背中、両脇と切り落していく。頭は轆轤で小さく引き裂かれる。それから腸・骨が切り裂かれ、人夫が処理場へ運ぶ。処理場は、それぞれ肉、骨そして内蔵用に分かれている。また、大工小屋、銛などを修理する鍛冶小屋、桶小屋それに舟大工小屋がある。

肉や骨は処理場で、数10人の人により細割され、大きい釜に入れて油を煮出す。釜が置かれた竈は17基あり、そこから土で造った倉庫、つまり土蔵へ油を流すために、樋と呼ばれる溝状または筒状の装置がある。普通10間余り（約20m）のセミクジラからは、油が200樽採れ、金額にして400両（現在の1千万円位に相当か）であった。鯨に棄てるところがない。

骨を煎じてから砂糖に入れるという（この意味がよく分らない）。筋は唐弓（意味不明）の絃（弦）に用いる。口の中の鯨ひげは細工物をつくり、棄てるところは耳骨（鼓室骨のことで、外耳と中耳との境に存在している鼓膜の周りを輪状に取り巻いている骨）のみで、その大きさは6～7寸（20センチ前後）、シャコ貝（2枚貝の1種で、扇形をしていて、大きさが130センチにも達し、熱帯の珊瑚礁に生息している）に似たものである。

以上が捕鯨見分記である。なお、江漢が絵画に長じていることは冒頭に述べた。その巧妙な絵筆になる捕鯨の絵を、日記の中に5枚ほどみることができる。

1枚目は、岸に引き揚げられた、一見セミクジラとわかる鯨の絵である。銛が各所に刺さった鯨の背中にのぼった2人の人物が描かれている。絵の中に書かれた説明によれば、立って指差しながら口釈しているのが亦之助、座ってきいているのが江漢である。知識慾の権化にもにも似た江漢のこと、恐らくはじめてみる鯨に、限りない興味を覚えたことであろう。鯨については、全身黒、鼻先の白いのは瀬という貝であると説明している。

2枚目には、瀬をクローズアップした絵が描かれている。瀬とは、石灰質の殻を有する甲殻類の一種で、フジツボのことである。さらにこの貝は、鯨の口や鼻

それから鰭（ここでは胸鰭を指し、通常立羽と呼んでいる）に付着しており、その上に菌のような物と説明された絵柄がある。その菌とは、節足動物、カメノテのことである。その菌を油で揚げて食べると付け加えられた説明は、当時の人々の食生活の一端を伺うことができて、大へん興味深い。しかし、筆者は現代の人がカメノテを食用に供しているという話は、聞いたことがない。

3枚目の絵は、鯨の山見を画いたものである。山見とは、鯨の発見につとめる人達が常駐している所である。したがって、当然のことながら、見通しのきく場所である。江漢の絵にも、海に迫った急斜面の山の上に、苫屋（菅や茅などで屋根を葺いた小屋）が描かれている。

4枚目の絵は、「鯨ヲカコム図」と説明されている。2頭連れの鯨が、1頭は潮を吹き、今1頭は潜りはじめている。それらの鯨をとり囲むようにして、13艘の鯨舟が合図の旗印をなびかせながら、どの鯨舟も8丁艪を漕いでいる絵柄は、江漢の目に映った鯨捕りの情景が想像できて、大へん興味深い。

5枚目は、「鯨ヲ解所」と説明された絵で、解所とは鯨の解体場のことである。海へ突き出した堤防によってできた入江の岸には、絵に加筆された説明によれば、17基のカグラサン（轆轤）が設置されていて、そのカグラサンで「肉ヲ巻キ切ルナリ」とある。恐らく、鯨肉をカグラサンで引っぱりながら、脊椎骨から長刃のように大きな包丁で、切りはずす作業のことであろう。

以上の司馬江漢による日記は、東京大学教授芳賀徹博士が指摘しているように、江戸文化時代の文芸家的特質を示したものである。そして、井原西鶴からほぼ100年後に生まれた司馬江漢も、西鶴と同様、観点は異なるけれども、捕鯨事業には殊の外魅せられたに違いない。

和歌・俳句・狂歌

捕鯨を詠んだ和歌では、土地柄紀州幕末の医者加納諸平の作があげられる。文化3（1806）年に生まれた彼は、江戸後期伊勢松坂に住んだ国学者本居宣長に学び、後にその養子となった本居大平の門下生であった。古事来歴を自在に用いた、才気ある加納諸平の歌風は、鯨捕りの世界にもみることができる。

すなわち、

鯨捕る熊野の船のハナつづき
花も紅葉も浦にこそあれ

雲かかるわだみの中に荒汐を
雨とふらせて　鯨浮べり

俳句では、江戸中期の俳人であり、画道に精進した与謝蕪村の

既に得し　鯨はにげて　月ひとつ

菜の花や　鯨もよらず海暮ぬ

があげられる。

狂歌では、江戸は品川沖の鯨騒動を詠んだものがあげられる。その鯨騒動とは、寛政10（1798）年のことである。4月30日に江戸を襲った台風の時、品川沖へ鯨が来遊した。

台風一過の翌日、その鯨を発見した漁師たちは、沖の方へ網を入れて鯨の逃げ道をふさぎ、船を並べて岸へと追い立てた。そこで、天王州（現在の天王町）へ逃げ込んだ鯨は容易に捕えられた。

いまだかって、江戸に鯨がその姿を現わしたことは、全くなかった（もっとも、鯨の仲間であるスナメリがいたことは間違いないが）。ということで、まず奉行所へ届け出たところ、時の11代将軍徳川家斉侯の上覧に供することとなった。5月3日のことである。その上覧が終ってからである。鯨を品川の海へ移して町民の見世物とした。そこは野次馬根性の旺盛な江戸っ子のこと。見物客が押すな押すなの大賑い。儲けごとに目敏い人は昔も同じ。はじめ24文（文は貨幣の単位で、明治維新直後は1文が1銭の10分の1に当る1厘となった）であった鯨見物の船賃が、すぐに100文まではねあがったといわれている。そこで生まれた狂歌が、

品川の沖にとまりしせみ鯨
みんなみんみんと飛んで来るなり

である。作者はわからない。

おわりに

以上のような一連の古典文学作品をひもとく時、文学には全く門外漢の筆者が述べることは、憚らざるを得ないが、江戸時代他に類をみない、おそらく前代未聞の一大工場制手工業であったに違いない捕鯨が、江

戸文学の一端を支えていたといっても過言ではあるまい。

さらに、古代に遡って枕詞ではあるけれども、万葉集にみる「鯨魚取り」を思考する時、いささか鯨贔屓の印象を与えかねないが、日本の古典文学特に江戸文学における捕鯨の存在は、決して小さくなかったといいたいのである。

注）一般に「真夏の夜の夢」として知られているけれども、原文にみられる「A midsummer Night's Dream」の midsummer は夏至の意味である。

したがって、ここでは「夏の夜の夢」と訳した。

佐渡島戸地村に残された寄り鯨の古記録

新潟大学理学部佐渡臨海実験所　本　間　義　治

新潟～佐渡沿岸における大型海産動物の漂着記録を再調査し、集大成を計っていた際に（本間，1990 a）、佐渡郡相川町戸地出身で、現在同町資料編纂室に勤めておられる三浦啓作氏から、耳寄りな話を二つ伺った。一つは、戸地海岸に建立されている亀の墓のことであり（本間，1990 b）、一つは寄り鯨の掛軸が戸地の植野家に所蔵されていることであった。

亀塚の方は、江戸時代の佐渡奉行所の官簿に基づいて編纂された『佐渡年代記』には載っていない古記録として注目された（本間，1990 b）。一方、掛軸二幅は拝見させて頂くことができたので、これらの解明を試みた。ほんの一例ではあるが、ここに紹介し、三浦啓作氏と植野家当主幡之氏の厚意に報い、感謝の念としたい。

件の掛軸二幅のうち（図1　古幅，2　新幅）、一幅は後刻（年代不詳）原図を写したもので誤字があり、「当時の古圖を復寫」と記してあった。新幅では、古図に加えて、戸地の聚落の西方沖に存在する黒鴨と、その左手に漂っているクジラ一頭の風景が新たに描かれていた。

この寄り鯨の写生図に私が注目したのは、朱線を引いて体各部の寸法（計測値）と、特異な部分の観察に基づく注釈が付いていた点である。このような写生図は、古文書中にもなかなか見つからないものだけに、貴重であり、解明を試みさせた由縁である。

古幅の文字は草書体で読み辛い箇所もあるが、それは新幅の方で読み取ることができる（図3）。掛軸より、このクジラは全長約11.2m（六間壱尺）のヒゲクジラの一種、多分コイワシクジラであろうと思われる。この寄り鯨のことは、『佐渡年代記』の12巻に「寛政二年　戸地村え鯨流れ寄る　長さ六間参尺あり」と載っている。佐渡奉行所の官簿を編纂し直した『佐渡年代記』の記事の方が著しく簡単なのは、前にも、漂着した稚アカウミガメの記録で経験済みであるが（本間，1986 a，b）、なぜ、寸法が二尺も異なっているのであろうか。次に、古幅の方は、いかにも目と胸鰭の水準より背方の部分を水面上に出して漂っている様に描かれているが、体のプロポーションは不正確であり、正に一幅の絵にすぎない。一方、新幅の方は描写がかなり正確に直してあり、まずはコイワシクジラらしい形状が伺える。しかし、胸鰭の付き方は、真骨魚類のそれのようでおかしく、まだしも古幅の方がよい。しかも両幅共、コイワシクジラの特徴である胸鰭上面の白色横帯は描いていないのが気掛かりである。また、大佐渡の寒村の住民が、“たけり”という語を知っていたのは興味深い。

今回の紹介が契機となって、呼び水効果をもたらし、さらに多くの寄り鯨の古図や情報が発掘されれば、望外の喜びである。なお、佐渡島内に建立されている鯨塚ないし鯨の墓については、すでに発表済みである（本間，1981）。

文　献

本間義治　1981：寄鯨と鯨霊塔．蒲原、(61)、24－40.

本間義治　1986 a：佐渡島の絵図師石井文海（江戸末期）の写生図珍敷亀をめぐって．両生爬虫類研究会誌、(33)、19－23.

本間義治　1986 b：石井文海（江戸末期）の動物写生図－新潟の水族誌．蒲原、(71)、28－41.

本間義治　1990 a：新潟・佐渡沿岸における大型海産動物の漂着記録再調．新潟大学理学部附属佐渡臨海実験所特別報告、5：1－39.

本間義治　1990 b：佐渡島戸地海岸にある亀の墓．（附）新潟～佐渡沿岸における海産爬虫類の漂着採捕記録追加．両生爬虫類研究会誌、(38)、(印刷中)

佐渡年代記．巻之一～巻之廿二（1601～1851）．

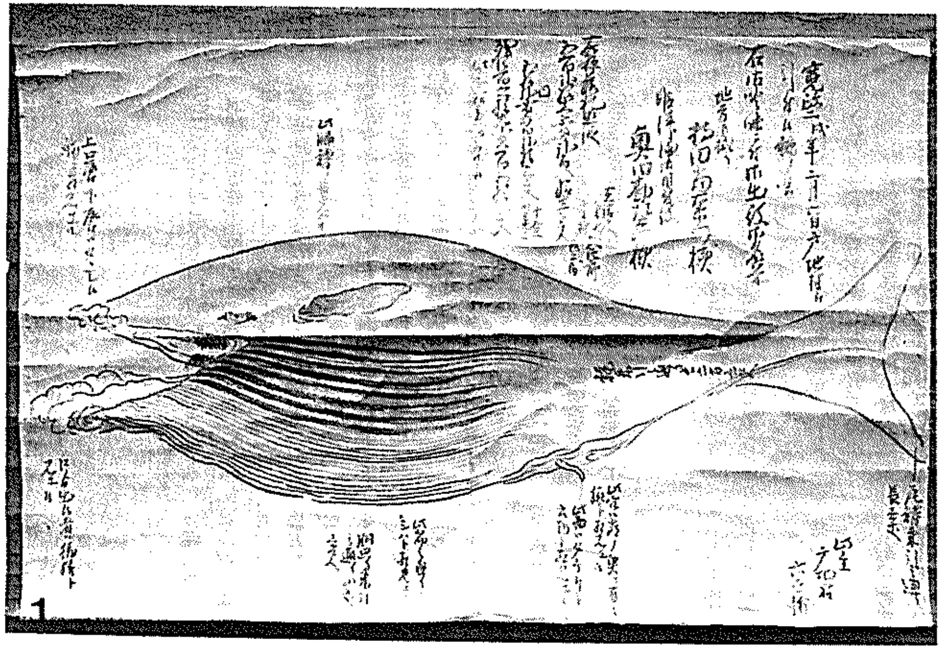

図1．寛政二戌年二月六日（1790年３月21日）に佐渡島戸地村（相川町大字戸地）へ漂着したヒゲクジラの一種の掛軸（縦36cm，横56cm）

図2．図１の掛軸を複写した掛軸
戸地海岸沖合いの岩礁黒嶋などが描き加えられている（縦130cm，横65cm）

寛政二戌年二月六日　戸地村江（一七九〇年三月二一日）
引付候鯨ノ図
右御吟味ニ付御出役御名前
　地方御掛り
　　持田雷右衛門様
姫津浦御目付役
　奥田勘左衛門様
　　　買請人
　　　　下戸町惣四郎
　　　　戸中村茂兵衛
右鯨落札値段
五百貳拾壱貫貳百八拾壱文
　内
五拾貳貫百貳拾三文十分一
　　御運上
残四百六拾九貫百五拾八文
　此分村方江被下候
上口唇下唇ハタタレ（爛れ）候
躰（態）ニ相見エル
口ヨリ出候者ハ臓腑ト見エ候
此脇（胸）鰭ノ長六尺五寸
鯨朱引之通リ長六間壱尺
胴回リ朱引之通リ貳丈壱尺
此筋之通リ（走向）ハ　シハ（皺）ト相見エル
此物ハタケリ（クジラの陰茎）ト云物ト相見エ候
此穴ハ常ノ魚ニ有之臍（肛門）ト相見エ候
尾鰭朱引之通リ長サ壱丈
　此主　戸地村　六兵衛
尚、新幅には「当時の古図を復写して
翠香（推考）誌す」とある。

図３．掛軸に記載されている内容
（　）内は著者の解説
＊　真の臍はもっと頭方寄りに位置する。

ストランディング・レコード—16

番号	日付	種類	頭数	場所	報告者	備考
O-118[*1]	20/07/90	シワハイルカ (L)	2	静岡県下田市 吉佐美多々戸浜	下田海中水族館	親－雌 体長2.34m 仔－雄 体長1.495m
O-119	9/08/89	スナメリ (D)	1	山口県下関市 彦島 竹の子島	岩本武人 (西日本クジラ研)	
O-120	20/08/90	ハナゴンドウ (L)	1	宮崎県宮崎市 青島	緒方得生 (宮崎県水産試験場)	雄、体長1.87m、
O-121	6/02/90	ネズミイルカ	1	新潟県新潟市 青山海岸	本間義治 (新潟大学理学部)	雄、体長1.65m
O-122	21/05/90	スナメリ (D)	1	愛知県碧南市 河方町（矢作川）	増田元保 (碧南海浜水族館)	雌、体長1.27m 体重18.1kg
O-123[*2]	24/08/90	オキゴンドウ (L)	1	秋田県南秋田郡 天王町（出戸浜）	田郷岡良和 (秋田県男鹿水族館)	新聞情報（秋田さきがけ新報-25/08/90) 体長5.3m
O-124	31/05/90	オキゴンドウ (D)	1	愛媛県今治市 大新田海岸	桧垣栄一郎	新聞情報（朝日新聞-1/06/90)
O-125	28/03/90	イチョウハクジラ (L)	1	北海道室蘭市東町 イタンキ浜	室蘭市観光振興課	雌、体長4.53m
M-030[*3]	19/09/90	ミンククジラ (D)	1	新潟県村上市瀬波沖 (定置網)	新潟県水産試験場	雄、体長5.55m
P-007	27/01/78	オットセイ (D)	1	秋田県秋田市浜田 雄物川河口	千葉克己 (秋田市大森山動物園)	雌、体長1.31m 体重35.4kg
O-126	8/09/90	スナメリ (L)	8	千葉県匝瑳郡 野栄町栢田浜 (地引き網)	山本宗市	2頭は放流 新聞情報（中日新聞-14/09/90)

*1 これらの情報は国立科学博物館の天羽綾郁さんより日本鯨類研究所へ報告されたものです。
*2 この個体を扱った読売新聞の記事を、秋田市大森山動物園の千葉克己様からお送りいただきました。
*3 この個体を扱った新潟日報の記事を、新潟県栽培漁業センターの野田栄吉様から、また記事及び計測値を、新潟市水族館マリンピア日本海の岡地伊佐雄様及び鈴木倫明様からお送りいただきました。

種類欄の（D）は、漂着時に死亡状態を、（L）は漂着時に生存を示しています。